

# 「海軍の伝統／分隊会」

## 原題 「分隊会」

原文はB5版1ページ

文章の題には「海軍の伝統」とある

以下、原文をそのままA4版に変換し、欄外にページを付与したもの

## 海軍の伝統

中村悌次

私には一人の医者の方がある。同じ駆逐艦で戦争をしたいわば戦友である。戦後偶然に再会して遠くないところで開業していることがわかり、それ以来月に一回は訪ねて、健康相談というよりは海軍の話をするのを楽しみにしてきた。先日訪ねたとき、彼の軍医学校同期である友人の遺稿を見せられた。その人は、山村雄一といって戦後大阪大学の総長までされ先年亡くなられたそうだが、司馬遼太郎との対談で「先生はどうしてそんなに海軍がお好きなのですか」との問いかけに対して答えた言葉が、このたび活字になった遺稿の中にあつたのである。海軍にいた期間は四年足らず、いわゆる二年現役で正規の海軍士官ではない軍医官が、このように海軍に愛情を持ち的確に理解していたことに深く感銘したので、みなさんに紹介することにした。

誰もが考える答えは、スマートさと国際性のあることだろう。だがこの二つだけなら、外交官でも商社員にもある。これだけではない何かがあつたはずである。

まず第一に考えられるのは「海」という環境である。広く青々とした海を眺めると心まで大きくなる。疾風怒濤の海を見ると自然の持つ力の強大さに圧倒される思いがするが、これに立ち向かう勇気と活力も与えられる。「海こそ我が住み家であり、墓場である」というのが海の男たちの偽らざる心境ではないか。

第二に挙げられるのは「生死」に常時直面しているということである。しかもそれは、「死なばもろとも」という運命共同体の一員としてであつて、必ずしも戦時に限られたものではない。平時においても、海軍の生活には、数々の生死にかかわる体験をする。「板子一枚下は地獄」というのが、船乗りの心得である。そして大海原を舞台に、スマートで逞しい海の男たちが命をかける訓練は、海軍ならではの気がする。

第三は、海軍の持つ科学性である。海軍では、暗黙の内に、軍人精神だけでは戦争に勝てないことがわかつていた。それは海戦に打ち勝つためには、科学的でなければならなかつたからである。航海にも砲戦にも水雷戦にも、まず科学が必要であつた。科学を尊重することは、合理的精神に通じ、互いに相手の専門を尊重し、海軍独自の「自由さ」があつた。合理的精神と自由とは表裏一体をなしている。軍人に自由があるというと、変なことと思われるが、士官室の中でも、夜のつきあいの中にも、おおらかでユーモアの通じる心温まる自由さがあつた。この科学性と自由とが我々大学出身の若きインテリの心をとらえたのだと思う。私は未だかつて海軍のような素晴らしい男の集団を見たことがない。

(以下略)

以上の山村さんの答えに、私は自由ということについて、もう一つ蛇足を付け加えたい。それは自ら正しいと思う意見は、遠慮なく発表できたことである。但しその発言は、無責任なものであつてはならずそれ相応の根拠が必要であり、また要すれば自ら実行に当たる用意がなければならなかつた。